

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

優しい声かけ

平塚市立浜岳中学校

二年 川嶋 大登

「はあ〜。」病院の待合室で、ため息が聞こえた。僕は顔を上げると、五十歳の女の人が、ため息をついていた。険しい顔をしてイライラしているように見えた。その隣には、車椅子に乗った五十歳の男の人が黙って静かに座っていた。たぶん夫婦だろうなと思った。その男の人が、申し訳なさそうに小さな声で、「トイレに行きたい。」と言った。その女の人はいきなり大きな声で「なんで家でしてこなかったの！」と男の人に怒鳴りつけていた。車椅子を怒りまかせに強く押し、トイレのドアに男の人がぶつかってしまったのではないかというぐらい雑な対応で、男の人に向かって、「一歩くらい歩けるでしょ！歩いてよ！早くしてよ！」

と怒鳴り散らしていた。

その病院のトイレは、スペースがあまりないみたいで、男の人が、うまくトイレが出来ないようだった。騒ぎを聞いた、病院の受付の人が、介助しに来た。受付の人が、トイレのドアを足で押さえながら男の人を支え、車椅子からトイレの便座に移動させようとしているのが、僕からちょうど見えた。でも、受付の人だけでは、なかなか思うように移動出来ず、受付の人が女の人に、「私を支えている間に、車椅子を後ろへ引いてもらってもいいですか？」と女の人に頼んでいた。女の人は驚いた顔をして、「はあ？私ができるの？なんで手伝わなくちゃいけないの？」と、大きな声で受付の人に言った。そのやりとりを見ていたおじさんが立ち上がり、トイレの所まで歩いて、何も言わずに手伝った。トイレはなんとか間に合ったみたいだった。「ありがとうございます。」受付の人が、おじさんにお礼を言った。女の人は知らん顔をしていた。

僕はその光景を、他の患者さんと、ただ見ているしか出来なかった。僕は、大きな声で怒鳴る女の人に対して、恐怖心と悲しい気持ちとムカつく気持ちでいっぱいになった。ひどい人だと思った。自分のだんなさんなのに、あの態度は許せない、だんなさんが可哀いそうだ！と思ったその時だった。

「介護は大変だよ。あなたも少し休んで。」と、手伝ったおじさんが、女の人に声をかけていた。女の方は黙って下を向いておじぎをした。少し泣いているようにも見えた。

僕はそれを見て、心臓がキュッと苦しくなった。女の方は辛い思いをしていたんだ。人前

で自分の家族を怒鳴りたい人なんていない。誰にも相談できず、一人で抱え込んでしまっていたのかも知れない。

僕はこの体験を機に、自分が変わりたいと思った。体の不自由な人や、お年寄りの人が困っていたら助ける、何か手伝える事があつたら進んで行えるようになりたいと思つた。

そしてあの時感じた、僕には全然思いもつかなかつた大切なこと。それは、介護する人に優しい声かけが出来る人になること。僕はそんな人間になりたいと強く思つた。僕は、今でもあの時のおじさんの姿を忘れることが出来ない。いや、忘れない。

僕もおじさんのように介護している人に勇気を出して優しい声かけをしていきたい。その優しい声かけひとつで、固まった心がほぐれその人が自分らしくいる事が出来て、心に余裕を持つて大切な人を喜んで介護する日が来ると思う。

一人で抱え込む介護ではなくて、地域全体、そして日本全体で、みんながみんなを笑顔で介護する世の中にしていきたい。